

# 135

2021 WINTER

## 美術館NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 6

佐藤一章《静物》(部分)  
昭和25(1950)年  
油彩、カンバス  
116.7 × 90.9cm

## 紅児会こうじかいのころ—「伊豆市所蔵近代日本画展」の背景

鈴木 恒志(学芸員)

当館で2022年2月11日から3月21日にかけて開催する「伊豆市所蔵近代日本画展 修善寺物語—大観と靱彦、紫紅たち」は、修善寺の老舗旅館「新井」旧蔵の日本画を中心に形成され、現在伊豆市が所蔵するコレクションのなかから、77点を展観するものである。今回紹介する作品のうち多くを占めるのは、明治末から大正初期の作品で、安田靱彦(1884-1978)や今村紫紅(1880-1916)、小林古径(1883-1957)、前田青邨(1885-1977)といった、後に文展や再興院展で活躍することになる画家たちが、20代から30代の頃に制作したものである。

この時期の彼らの活動として見逃せないのは、紅児会という研究団体での活動である。本稿では、新たな日本画を探求することを目的としたこの団体が、いかにして始まったのか概観したい。

明治31(1898)年、有職故実を得意とする歴史画家、小堀鞆音こぼりとんと(1864-1931)に入門した靱彦は、その年に同門の磯田長秋(1880-1947)らとともに紫紅会を結成した。今回の出品作である《吉野訣別》(図1)は、明治32(1899)年の紫紅会に出品した作品である。本図は、源義経が兄の頼朝による追討から逃れるため、吉野を経由して奥州へ落ち延びる際、囀として一人残ることを決めた家臣・佐藤忠信に対し、自らの兜と鎧、太刀を下賜するという『義経記』に取材した場面を描いている。師の鞆音のもとで学習した有職故実は登場人物の着衣に明確に描かれている一方、単なる武者絵に終わってはいない。義経の顔貌や、ひざまずいて義経の下賜を受ける忠信の背中からは、この瞬間が今生の別れとなるのを互いに察しているかのような悲哀の念が感じられる。本図からは、靱彦が15歳にして、すでに歴史画に人物の内面を映し出す試みをしていたことがうかがえる。

さて、互いに作品を持ち寄って批評し合う研究会であった紫紅会は、明治33(1900)年、京橋区(現在の中央区南部)鍛冶橋の貸席で初めて研究会を兼ねた展覧会を開いた。そこに現れたのが、自分と同じ名前を冠する展覧会に興味を持った今村紫紅であった。紫紅は展覧会を見るやいなや、それぞれの作品に忌憚のない意見をぶつけていったようで、しかもその批評がいずれも的を射ていたため、靱彦たちと意気投合して紫紅会に合流した。ちなみに、このとき紅児会に改名するのであるが、これに関して、紫紅と同じ松本楓湖門下の牛田雞村うしだけいそん(1890-1976)が面白い話をあげている。

ところが会名が紫紅会であっては、まるで今村の会のようだというので、会名を改めることになった訳であるが、中々いい案が出なかった。ある日みんなうちつれだって銭湯に行ったが、風呂の中でもその会名の話が出た。その時誰かが「俺達は今風呂につかっている、裸になって新しいものを作ろうとしているのだ。丁度赤子のようなものだ。だから紅児会と云うのはどうだ」と提案したが、みんなそれはいいと言うことに一決して、そこで会名は紅児会と改められたのである。<sup>\*1</sup>

靱彦が後に「自分達の持たないものを豊富に持っていた紫紅を迎えて得るところ



図1：安田靱彦《吉野訣別》伊豆市蔵



図2：今村紫紅《枇杷叭叭鳥》伊豆市蔵

極めて大きく、子どもっぽい会が漸く大人になってきた観があった」<sup>\*2</sup>と追懐しているように、紫紅が合流し、会名を紅児会と改めたあたりから、本格的な研究会兼展覧会が始動したのであった。

紅児会は明治35(1902)年7月に第1回展を開催し、不定期ながら年1回から3回のペースで大正2(1913)年まで続くことになる。この間、「伊豆市所蔵近代日本画展」に登場する画家としては、明治35年11月の第2回展に磯田長秋、広瀬長江(1884-1917)らの出品が確認でき、また明治37(1904)年10月の第5回展では岡山県出身で、靱彦と同じく小堀鞆音に師事した棚田暁山(1878-1959)の名も見え、さらに明治43(1910)年3月の第11回展には梶田半古門下の小林古径、前田青邨が出品し、同年7月の第12回展では橋本雅邦門下の石井林響(1884-1930)も確認できる。

紅児会における各人の画業の多くは歴史画に集中していたわけだが、一方で明治40(1907)年第8回展頃から、風景画や花鳥画も現れはじめる。この事情を今村紫紅は次のように語っている。

処が元来が人物画を描く連中許り集まつて居る会なので、そのうちには次第次第に、会員総ての画風が頗る接近して来て、中には落款を隠すと何人の作品であるかが分からない。といふやうなものも出て来たので、この弊風を打破せねばならぬと云ふ問題が出て来た。(中略)其時に安田君は『新しき光』を出品し、私は『苦行林』を出した。他の会員も種々の試みをやつて、その時から『山水画』の数も大に出品が増加して来た。<sup>\*3</sup>

ここでいう「山水画」は、当時の出品作から推して、水墨のそれに限るのではなく、彩色のものも含めた風景画を指していると思われるが、まさにこの風景画こそ、紫紅が大正元(1912)年、第6回文展に出品した《近江八景》(東京国立博物館蔵)を皮切りに、晩年まで追求し続けた画題であった。

伊豆市が所蔵する近代日本画の作品の多くは、紅児会で追究された画題である歴史画、風景画、花鳥画である。これは、川端龍子かわばたりゅうし(1885-1966)が明治末の新井旅館を「紅児会」の根城」<sup>\*4</sup>と呼んだことから分かるように、紅児会に所属していた画家たちが、まさに紅児会の活動期に制作した作品が集まっているからである。「伊豆市所蔵近代日本画展」出品作は単に新井旅館主人との交流を伝えるものであるばかりではない。紫紅の《枇杷叭叭鳥》(図2)には菱田春草(1874-1911)の作品からの学習が認められるなど、彼らの画業の中で重要な意味をもつ作品もある。今回の展覧会では、新井旅館における若き日の日本画家たちの交流の様子を探るとともに、こうした側面も可能な限り紹介していきたい。

【特別展】「伊豆市所蔵近代日本画展 修善寺物語—大観と靱彦、紫紅たち」(会期：2022年2月11日～3月21日)

\*1 牛田雞村「紅児会の頃」(『三彩』第31号、1949年)、日本美術院百年史編集委員会編『日本美術院百年史』三卷下(資料編)、日本美術院、1992年 所収

\*2 安田靱彦「今村紫紅のこと」(『三彩』第31号、1949年)、安田靱彦『画想』中央公論美術出版、1982年 所収

\*3 今村紫紅「紅児會の頃」(『文章世界』第11巻第4号、1916年)、日本美術院百年史編集委員会編『日本美術院百年史』三卷下(資料編)、日本美術院、1992年 所収

\*4 川端龍子『わが画生活』大日本雄辯会講談社、1951年

## 2022年度の特集、佐藤一章展に向けて

廣瀬 就久(主任学芸員)

佐藤一章(1905-1960)の作品をまとめて紹介する特集を、来年度に開催するため準備している。常設展(岡山の美術展)のなかで行う。今年度開催の予定であったが、コロナウイルス禍により1年延期となった。

佐藤は現在の矢掛町生まれである。矢掛中学校を卒業後、1929年に東京美術学校(現:東京藝術大学)西洋画科を卒業した。在学中の27年には、第8回帝国美術院美術展覧会(以下「帝展」と略)で作品が初入選するなど、評価を得ている。32年には美術団体東光会の会員となり、中心的な会員として活動した。45年1月に疎開のため岡山県に戻り、55年まで同県で制作活動を続けた。50年から岡山大学教育学部の教授になる。53年には同学部に特設美術科が新設され、主任教授を務めた。

画業当初は、《背面裸婦》(1929、図1)など、女性像や裸婦に取り組んだ。のちに《陶工》(1933)や《指物師》(1945)という職人、また《漁夫》(1938)や《麦秋の頃》(1948)に描かれた農民のように、同時代の日本人を描くようになる。そして《御堂の雪》(1948、図2)や《大歩危》(1953)などでは、柔和な色調で、また勢いのある筆遣いで、日本の農村と自然の風景を描き続けた。

疎開中の佐藤は、岡山の美術界に大きな影響を残した。46年の第1回岡山県洋画展覧会(現:岡山県美術展覧会)では審査員を務める。47年には東京で開催された第3回日展の審査員となり、同展の岡山への巡回を実現させた。設置に尽力した岡山大学教育学部特設美術科からは多くの美術家が育つ。岡山の画家にとっては、県洋画展入選と特設美術科入学が、身近にある新たな目標になった。

当館では、第9回帝展で入選した《裸婦》(1928)から、遺作陳列された《那須ヶ岳》(1960)、《柿の木と丘》(1960)まで、28点の油彩画を所蔵している。また妻の英子氏からは、90年度に数多くの水彩画、素描をご寄贈いただいた。現在寄託中の、作家による素描、日記帳についても、展覧会までに整理のうえ展示したい。

佐藤作品の常設展(岡山の美術展)における出品状況を振り返る。開館間もない88~89年度には、油彩画19点をまとめて展示した。そして上記のご寄贈を受けて、91年度には、油彩画7点と、水彩画と素描45点を展示した。以後は96年度に油彩画18点を展示したのみである。今回の特集は26年ぶりとなる。

毎年度に1回、中山巍、満谷国四郎など、所蔵品の多い作家の特集を継続して開催する。調査の成果については、展覧会における印刷物や年度ごとの紀要で掲載する。

※本文中の作品は、すべて岡山県立美術館の所蔵品である。美術館ホームページの

「所蔵作品検索システム(<https://jmapps.ne.jp/okayamakenbi>)」で、画像と基本情報を見ることができる。



図1:《背面裸婦》油彩、カンバス 112.1×145.5cm 1929



図2:《御堂の雪》油彩、カンバス 116.7×90.9cm 1948

## Museum × 大学—地域社会と博物館(美術館)

岡本 裕子(主任学芸員)

当館は、2017年度より岡山大学教養教育科目/実践知・感性(実践知)\*1「地域社会と博物館(美術館)」に、岡山カルチャーゾーン\*2内博物館施設のの一つとして参画している。本授業は、多様な専門分野で学ぶ学生が、岡山カルチャーゾーン内博物館施設の学芸員によるレクチャー、及びワークショップなどの体験を通して、それぞれの目的、役割、現状、可能性などについて学習すると同時に、学習チームを形成して、市民と博物館(美術館)を結ぶ在り方を検討し、その実現に向けて具体的方策を提言としてまとめてプレゼンテーションを行うという授業である。

筆者は、「ミュージアムの“常識”」に揺さぶりをかけ、学生一人ひとりが、「自分」としての美術館の存在意義を自らの言葉で語るようになることをねらいとして、当館でのプログラムを実施している。冒頭で「あなたにとって、美術館は何をすることところ？」という問いを投げかけ、現在取り組んでいる教育普及プログラムの事例紹介や、その一つを体験してもらった上で、冒頭と同じ問いを最後にもう一度投げかけている。

学生のレポートには、その問いと真摯に向きあった姿が記されている。学生がつむいだ言葉を二例紹介する。

—自分にとって「美術館とは何か」について考えた。最初の授業で質問された時には、「自分の考えを深められるところである」という発表をした。しかし、チーム内で活動したり、美術館の方のお話を聞いたりする中で、「他者の意見を聞いて自分の考えを深めるところ」ではないかと考えるようになった。今回の学びをもとに、「美術館の在り方、美術館とは何か」について今後も考えていきたい。そして、今回学んだこと、心動かされたことを周りの人と共有していきたい。

—この授業を通して、美術、美術館に対しての考えが大きく変わりました。今まで「美術館ってどんなところ？」という問いを立てたことがなかったからです。最終的な自分の考えとしては、「美術とは、正解のない問いと向き合う機会」だと思います。なので、「美術館とは、決して完成されることのない答えをじっくり考えることができる場所」だと思います。非日常の空間にあるべきもののだとも感じました。普段(日常)気づけないことにも少しの余裕をもって気づける環境は、非日常にこそ存在するからです。この授業を通して、地域社会、つまり我々も美術館と積極的に関わっていかないとダメな感じました。これからは、もっと正解のない問いや自分と向き合いたいと思います。

5年目を迎える本授業が例年通り9月から始まっている。活動報告会(2022年2月6日開催予定)の後、どのような学生自らの言葉が生まれるのか楽しみである。



岡山市立オリент美術館「オリентとその美術工芸」2020.10.10実施



林原美術館「地域社会における博物館」2020.10.18実施



岡山県立美術館「ユニバーサル・ミュージアム—ミュージアムの“常識”って本当?」2020.10.25実施

\*1:岡山大学基幹教育センター 教養教育部門  
<https://www.iess.ccsv.okayama-u.ac.jp/kikan/kyouyou/> (参照 2021-12-07)

・岡山大学の実践型社会連携教育 その1「Community-Based Learning(CBL)の全学展開」(前田芳男・山田一隆・吉川幸 岡山大学地域総合研究センター)  
<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/forum/kanri/forum/pdf/20180322174230.pdf> (参照 2021-12-07)

\*2:岡山カルチャーゾーン  
<http://www.okayama-culturezone.jp> (参照 2021-12-07)

## 新収蔵品紹介

# File 20

兼行誠吾  
《光の帯 Collapse》

古川 文子(学芸員)



兼行誠吾《光の帯 Collapse》2019

兼行誠吾は、1979年岡山県岡山市に生まれ、会社勤務を経て20代のときに陶芸の道を志す。岐阜県立多治見工業高等学校専攻科の陶磁科学芸術科で基礎から技術を習得し2007年に卒業、八ヶ岳高原(長野県)の陶芸工房で経験を積み、2010年から愛知県瀬戸市に工房を構えた。陶磁器の長い歴史の中で多種多様な広がりを見せる釉薬の存在に触発され、材料の調合や試作を重ねて、これまでにない技法、新たな表現の可能性を探り続けている。素地を透かし彫りにした穴を透明釉で埋め焼成する「蛭手」は、文字通りホタルの光のような点状の装飾文様に用いられる伝統技法である。ところが兼行は、釉薬が穴を埋め器体の一部を構成していることに着目、一度切り離れた素地を釉薬で線状につなぐ「線蛭」という独自の技法を考案し、試行錯誤の末に完成させた。本技法による「光の帯」シリーズの作品は、点から線へと概念を覆す斬新さのみならず、透過する光のうつくしさを際立たせる洗練されたフォルムや、手にした時の安定感、使い心地のよさも相まって、国内外で高い評価を得た。その集大成とも言える普遍的な器形の5点一組の《光の帯》(2015)で、2017年に第10回「I氏賞」大賞を受賞している。

本作は、「第九回I氏賞受賞作家展 あたらしい古典 炭田紗季・兼行誠吾」(2019)に、「光の帯 Ring」・《光の帯 Spiral》とともに出品された。「線蛭」の技法による制作の過程で、器としての形を留めない失敗作に面白さを見出し、偶然性を取り入れた造形表現に発展させている。また同展出品の《象》(右図)は、有機的な色彩と質感をもつ「社」シリーズの作品である。年月を経た古器物の緑青や、苔むした岩にも似たその表情は、釉薬に含まれる酸化金属の種類と配合により、焼成時の化学反応から生み出される。一見、前述の《光の帯 Collapse》とは全く趣きの異なる作品であるが、釉薬へのたゆまぬ探求から生まれた表現技法であることに変わりはない。展覧会への出品を機に収蔵となった二つのシリーズの作品から、作者を魅了した釉薬の無限の可能性や奥深さをうかがうこともできるだろう。

兼行は、昨年山梨県北杜市に拠点を移し、八ヶ岳高原の工房に通い制作を続けている。第二の故郷と慕う自然ゆたかな地での新たな展開に注目したい。



兼行誠吾《象》2017

## 展覧会スケジュール

12月  
December

11月18日|木|—12月12日|日|

【特別展】  
第68回 日本伝統工芸展 岡山展

\*新型コロナウイルス感染拡大に伴い、会期やイベントなどが変更になる場合がございます。最新情報は岡山県立美術館HPをご確認ください。  
<https://okayama-kenbi.info>

11月13日|土|—12月19日|日|

【特別展】  
熊本県立美術館所蔵 今西コレクション  
肉筆浮世絵の世界 アナザーワールド発見!

肉筆浮世絵とは、江戸時代に庶民間に広く流行した浮世絵版画に対し、絵師が絵筆をとって描く一点限りの絵画のことです。希少性が高く富裕層に愛された肉筆画と、多数の複製を安価で提供する版画とは、同時期にそれぞれの進化を遂げました。本展は今西コレクションの中から厳選された約130点を展示し、美人画や役者絵など江戸文化とともに花開いた肉筆浮世絵の魅力や余すところなく紹介します。花魁や遊女、町娘など美人たちの競演や、ダンディな歌舞伎役者、四季折々の行事や遊び、名所風景など見所満載です。

12月11日|土|、12月12日|日| 13:30-14:00

トーク 「肉筆浮世絵入門」  
講師 中村麻里子(副管理者)  
会場 地下1階講義室(先着50名) ※事前申込優先、聴講無料

1月  
January

前期:12月5日|日|—12月19日|日|

後期:2022年2月20日|日|—3月6日|日|

【教育普及展】  
第3回 みんなの参観日

「図工の時間・美術の時間—子どもの学び—」  
みんなの参観日は、「図工の時間・美術の時間」の中で大切にされている子どもの思いや主題、そして先生の支援や子ども同士の関わりを切り口とした「子どもの学び」を美術館に展示して、みんながそれを参観する場です。

2022年2月12日|土| 14:00-14:30

トーク 「担当学芸員による  
フロアレクチャー」

講師 鈴木恒志(学芸員)  
会場 2階展示室 ※要観覧券

2月  
February

12月21日|火|—2022年2月10日|木|

メンテナンス休館

2022年2月11日|金・祝|—3月21日|月・祝|

【特別展】  
伊豆市所蔵近代日本画展 修善寺物語  
—大観と靱彦、紫紅たち—

伊豆市の所蔵する近代日本画コレクションは、修善寺の老舗旅館、新井旅館の3代目主人である相原寛太郎(号:沐芳、1875-1945)のもとに集った、近代日本画の巨匠として知られる画家たちの作品を中心として形成されています。単なる旅館の経営者ではなく、日本画家たちのパトロンであり良き理解者であった彼のもとに、横山大観や安田靱彦をはじめ、今村紫紅、小林古径、前田青邨、川端龍子らが集まり作品を遺しました。本展ではこれらの作品のうち、靱彦や紫紅らの世代の、明治末から大正初期の作品を主に展示します。この時代、彼らはみな20代から30代前半という青年期で、既存の型の模倣から脱し、それぞれにとっての新たな日本画の創出に奔走していました。本展を通して、巨匠たちの若かりし頃の研鑽の跡を探るとともに、パトロンを軸とした心温まる画業も紹介します。

3月  
March



収蔵品の紹介 Vol. 6  
佐藤一章《静物》  
昭和25(1950)年 油彩、カンバス 116.7×90.9cm  
緑色の鉢には、梨、りんごやみかんという、秋から冬の果物があります。スキの穂は秋らしいです。花の文様がある布が敷かれるなど、賑やかな食卓です。のんびりした時間が流れています。果物を食べて、またお茶を飲んで、ゆっくり過ごしたいと思います。(廣瀬)

### 紅葉狩り

守安 収

11月22・23日、京都で紅葉狩り。これまで行ったことのないところへという妻のリクエストに応じて訪問先を選びました。左京区一条寺の圓光寺は日時予約制のため、門前で悄然と帰る人が続出していた割には境内は大賑わい。私はかつて特別展『魅惑の水墨画—墨戯』(2002年10月開催)の明治以前を受け持ちましたが、出品作のうち円山応挙筆《雨竹風竹図屏風(重文)》は彼の最高傑作のひとつとして名高く、この圓光寺で制作され伝来したものの。その借用交渉や返却のお礼に参上したにもかかわらず、当時と今とで寺内がどんなふうに変ったのかの記憶が定かでなく、この度はただただ紅葉が美しいと感嘆するばかりでした。美術は魅力的、自然も同じく素晴らしく、このふたつが揃えば無敵ですね。▼『墨戯』展では、聚光院の狩野永徳筆《花鳥図襖16面(国宝)》も拝借しました。その頃の岡山県は財政危機の真只中で、館も特別展の開催経費の捻出に苦慮する状況にありました。ところが、県政に影響力をもつ某氏が「こんな時こそ文化だ」と各所に働きかけてくれたおかげで予算が少し増え、結果的に地方の公立館としては比較的大きめの展覧会を作り上げることができたのです。▼明治以後は福富学芸員(現課長)が担当し、横山大観らの大物に加えて現代の日本画壇で活躍する菅原健彦や浅見貴子らの作品が岡山初登場。以来、私は彼や彼女の画業を見つめています、その発展ぶりは幸せな気分をもたらしてくれます。しかし、20年ぶりに同展ゆかりの地を再訪して散る紅葉を浴びているうちに、いつしか幾人もの出品作家や所蔵家が黄泉の国へ旅立ってしまったことに想いを馳せた次第です。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48  
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648  
Email [kenbi@pref.okayama.lg.jp](mailto:kenbi@pref.okayama.lg.jp)  
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から  
・徒歩約15分  
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分  
・宇野バス 四御寺、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩約3分  
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00(入館は16:30まで)  
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

\*一部の公共交通機関では新型コロナウイルス感染拡大に伴い、一部運休している場合があります。ご利用の際は事前にご確認くださいませよう願いたします。

### 編集後記

中西ひかる

12月21日から来年2月10日まで、空調工事のためメンテナンス休館をします。少し長いお休みになりますが、これからも皆様に快適に過ごしていただけるよう準備してまいりますので、年末年始は今号を読みながら次回の開館までしばらくお待ちいただけたらと思います。さて、話は変わりますが、今年も地下1階屋内広場にて「みんなの参観日」を開催中です。3回目を迎えた今年、県内の小中学校8校で行われた図工・美術の時間や、それを学ぶ子どもたちの姿を前後期に分けて紹介しています。観覧無料ですので、当館へお足運びの際はぜひご参観ください。